

第二部 新古今歌壇史研究

- 1 承久の乱後の後鳥羽院近臣の和歌活動……………107
- 2 建永元年七月「和歌所当座歌合」前後……………133
- 3 土御門家の歌人たち……………151
- 4 源通親流の文芸意識——昨夜年代記や候ける……………173
- 5 シンポジウム報告 竟宴の意義——元久二年三月前後……………193
- 6 『新勅撰和歌集』における定家の旧派歌人の発掘……………215

第三部 新古今時代和歌表現研究

- 1 「霞」題歌の変遷(二)——平安後期以降を中心に……………243
- 2 「霞」題歌の変遷(二)——「霞の底」「霞の奥」の消失……………273
- 3 「霞」題歌の変遷(三)——西行・歌林苑歌人を中心に……………295
- 4 新古今時代の哀傷歌(二)——後鳥羽院尾張哀傷歌群を中心に……………311
- 5 新古今時代の哀傷歌(二)——慈円との十首歌贈答……………331
- 6 新古今時代の哀傷歌(三)——美福門院加賀哀傷歌と『源氏物語』……………345
- 7 『新古今和歌集』八〇一番歌について——「むせぶもうれし」の意味するもの……………359
- 8 藤原定家の良経哀傷歌群について……………387
- 9 歌枕「水無瀬」考……………411
- 10 犬鳥——歌枕を創出する試み……………431

初出一覧

おわりに

445
443

凡例

- 一、本書で引用した「勅撰和歌集」の本文・歌番号は、『新編国歌大観 第一卷 勅撰集編』（角川書店、一九八三年）を用いた。
- 一、本書で引用した「歌合」の本文・歌番号は、『新編国歌大観 第五卷 歌合編、歌学書・物語・日記等収録歌編』（角川書店、一九八七年）を用いた。
- 一、本書で引用した「私家集」の本文・歌番号は、『私家集大成』（明治書院、一九七三年）を用いた。ただし『如願法師集』については、「冷泉家時雨亭叢書68 資経本私家集 四」（朝日新聞社、二〇〇五年）を対校している。
- 一、『新古今集』の撰者名注記は、『校訂新古今和歌集』（橋本不美男・有吉保他編、武蔵野書院、一九六四年、底本鷹司城南館本）を用い、注記は以下の通り略している。
源通具〔通〕・藤原有家〔有〕・藤原定家〔定〕・藤原家隆〔隆〕・藤原雅経〔雅〕
- 一、作品名には『』を付し、歌合・歌会等には「」を付した。
- 一、引用文の出版年は、西暦に統一した。
- 一、引用文の表記（漢字・仮名・濁点等）については私により適宜改めた。また、論述上の必要に応じて傍線・波線・傍点を施した。

はじめに

鎌倉時代初頭の新古今和歌集撰集時代は、藤平春男の研究によって次の四期に分けられる。

- 建久期（建久元年～正治二年）
- 元久期（正治二年～承元四年）
- 建保期（建暦元年～承久三年）
- 貞永期（承久三年～仁治三年）

『新古今歌風の形成 改訂版』（『藤平春男著作集第1巻』笠間書院、一九九七年）『新古今集』の撰集に関わった歌人たちは、下命者後鳥羽院を除き、藤原定家・藤原家隆などそのほとんどが前代の勅撰和歌集である『千載集』初出歌人であり、風巻景次郎が「千載集歌人」と名付けたように（『新古今時代』塙書房、一九五五年）『新古今集』撰集時期には、すでに一定の年齢と歌歴を重ねたベテラン歌人といえる存在であった。

しかし、元久期に入ると歌壇の中心となった後鳥羽院が、周辺の女房や北面の武士などから歌才のある者を抜擢することをはじめめる。そのような主に後鳥羽院の意向によって歌壇に登場する新進歌人が、女房では宮内卿、近習では藤原秀能・藤原雅経らであった。本書第一部は、そのいわば後進歌人であった藤原秀能の研究を中心とした。

秀能は、藤原秀郷流の後鳥羽院北面で元は源通親に仕えていたが『如願法師集』によれば、正治二年から小規

模な歌会に出詠し、「建仁元年二月八日十首和歌」を契機として、後鳥羽院歌壇に抜擢され後鳥羽院の近臣となった(第一部1・2)。その後、院歌壇において活躍するが承久の乱後、出家して如願と号して隠栖した。しかし乱後も後鳥羽院を思慕し、その帰京を待ち望みつつ院に忠実な旧近臣との交流があった(第一部3・4)。

次に第二部では、秀能を中心として新古今歌壇全体の動向について、承久の乱後の後鳥羽院近臣の小グループの活動を考察した(第二部1)。それに派生し、後鳥羽院歌壇の分岐点として、建永元年の藤原良経の死、後鳥羽院の寵后尾張の死に伴う歌壇の雰囲気の変化について論じた(第二部2)。

第二部3・4は、新古今集撰集時代において、権門として権勢を誇った土御門通親とその一族について、その和歌活動と後世への影響について考察した。第二部の最後には、日本大学国文学会におけるシンポジウム報告の記録(第二部5)と、『新勅撰集』においてその二代前の勅撰和歌集『千載集』に初出しており、新古今集撰集時代にすでに勅撰歌人となっているにもかかわらず、『新古今集』には入集せず、次の『新勅撰集』においてふたたび入集されている歌人について検討し、撰者藤原定家の『新勅撰集』撰集時代における『千載集』時代への回帰性が見られることについて考察した(第二部6)。

第三部では、新古今時代前後での和歌表現について、「霞」「哀傷歌」「歌枕」をテーマにして論じた。「霞」は、第一部1において論じた「建仁元年二月八日十首和歌会」における歌題の一つ「霞隔山雲」の各歌人の和歌表現の検討から派生したものである。「霞」と「山雲」という和歌表現史上近似した歌題がこの時の「和歌試」として出されており、ともに視界を遮る白いベールとしてあるいは、遠方で白い雲や桜と見まがうものとして、当時認識されていると思われ、それをどのように分けて表現するかがこの時、試されていた。そこで、平安後期から

新古今集撰集時代における「霞」題歌の表現の変遷を追い、「霞の奥」「霞の底」といった表現が現れるが、それは新古今集撰集期には消失することを指摘した(第二部1〜3)。さらに第一部において、秀能の『新古今集』補入歌の中に、父秀宗の哀傷歌が含まれていたことから派生して、この時代の哀傷歌の特徴について検討し、身近な人物の死を悼む場合でも、『源氏物語』や『白氏文集』などを本歌・本説にするなど、客観的で美的に表現されていることを俊成・定家などの詠歌から考察し、また当時後鳥羽院をはじめ多くの歌人たちの精神的支柱であった慈円との間で、十首単位での贈答歌が盛んに行われたことを指摘した(第三部4〜8)。

最後に、やはり秀能歌から派生して、後鳥羽院の離宮があり、新古今歌人たちにはなじみがあった「水無瀬」が、特に後鳥羽院の「元久詩歌合」時の詠歌の影響で、ことに後鳥羽院の治世と強く結びついた地名として認識され、それを新たな歌枕として創出しようとした試みがあったこと、さらに同様に新たな歌枕創出の試みとして秀能の「犬鳥」歌などもその一部であると思われることを考察した(第三部9・10)。

以上、本書においては、これまでの研究の中心である、藤原秀能の和歌活動とそこから派生した問題について検討した論文をまとめ、新たに書き下ろしを加えた。

本書の書名を「新古今時代後期和歌表現の研究」とあえて「後期」としたのは、当初に述べたように秀能が、定家ら『千載集』時代から活動している歌人ではなく、後鳥羽院が和歌活動を積極的に始めた正治・建仁頃後から活動をはじめた歌人であり、その活動期間は藤原俊成・定家らがいわゆる新風和歌を形成した元久期以後からであったことから、あまり練れない表現ではあるが、新古今集撰集時代に入ってからという意味で「新古今時代後期」と捉えようとした試みである。